

渋谷聖公会聖ミカエル教会2024年度 ヒルダ・ミッシェル信徒講座

「信徒の働きの多様性・可能性」ーチームミニストリーにおける信徒の働きー

第2回 2024年9月21日（土）午前10時ー11時30分

担当 主教 加藤博道

「信徒奉事者の働き 竹田真元東京教区主教のビジョン」

ー宣教のビジョンと信徒奉事者ー

I. はじめに

◇お招きいただいたことへの感謝と、与えられたタイトルへの困惑。

◇1990年代、竹田真主教のリーダーシップのもとで展開した東京教区の宣教活動の一側面について、その背景を含めてお話することになる。その中で「信徒奉事者」について触れていく。

◇自己紹介

◇竹田主教の言葉については、以下の公にされた文書資料 に基づいて引用。



・竹田真著『信徒奉事者とは一教会における信徒の役割についてのふりかえりー』

東京教区宣教委員会 信徒奉事者研修準備プロジェクト

発行 1994年12月1日

・「信徒奉事者研修プロジェクト」報告書 1995ー1996年

東京教区・信徒奉事者研修プロジェクト 発行 1997年3月

・「東京教区時報」竹田主教退職記念特集号

発行 2001年7月22日

・1988年より2000年までの東京教区教区会決議録（教区主教告示）

<信徒奉事者という用語について>

信徒奉事者の前身は、かつて伝道師の補佐の役割であった「特志伝道師」。特志伝道師は、伝道師ほどの正規の準備教育を受ける必要はなく、教会からの報酬も得ず、信徒の「認可された働き」であった。その役割は牧師の元で「礼拝の補佐および未信徒の教導に当たらせる」（1947 年総会）ものであったが、やがて「未信徒の教導」はなくなり、名称も 1968 年総会において「信徒奉事者」に変わる。そういう経緯の中で、はじめからあまり明確に職務を決めることにはならなかったようで、現在も「礼拝において、牧師に協力する」としか規定されていない（『日本聖公会法憲法規』第六章第六三条）。英国はじめ海外聖公会では、その働きはより明確に、かつ多岐にわたっているようで、Licensed Lay Minister（認可された信徒の奉仕職）等、いくつかの呼称があるが、この講話においては「信徒奉事者」という名称でお話していく。

II. ヨハネ 竹田眞主教のこと、時代的背景とともに

1930 年 6 月 15 日 東京・築地生まれ

立教大学、聖公会神学院、ニューヨークのユニオン神学校で学ばれる

1970 年 聖公会神学院校長 神学教育の大きな改革・刷新後の校長

1988 年 1 月 6 日（顕現日） 東京教区主教（1998 年からは首座主教）

2001 年 定年退職（東京教区主教在任 13 年間）

定年後も、聖公会関係機関の理事長等、全キリスト教界的な要職を担われる。

2021 年 9 月 13 日 逝去 91 歳

◇1970 年代、世界的な教会とその宣教（礼拝を含む）に関する、大きな刷新の動き。

1962—65 年 第 2 バチカン公会議（教会は「神の民」、教会のすべての分野、礼拝への信徒の能動的・行動的な参与の強調）、1968 年以降のランベス会議、WCC 等の国際的な会議。この傷つき分断する世界において「教会とは何か」！？ 20 世紀は教会論の世紀。教会の制度、宣教・伝道理解、礼拝に関して厳しい問い直しの時代。関連して世界的に祈祷書改正の時代へ。信徒使徒職、共通祭司職（洗礼の約束に基づいた奉仕職）の再認識。背景としては、とくに 19 世紀以降の聖書学、礼拝学等の進展、リタージカル運動、エキュメニカル運動等々の重層的な影響がある。

1970 年には、日本聖公会でも「レイ・ミニストリー委員会」が開催されたという記録がある（浦地洪一・管区事務所『日本聖公会宣教 150 年の航跡』）

◇聖公会神学院の教育改革と、竹田校長の就任

そうした中で、1960 年代後半、聖公会神学院も大きな教育改革。1970 年に 1 年間の休校、教員体制の刷新。「ミッシオ・デイ」—この世界にすでに働いておられる神の宣教に、私たちが気づき、参与していく。神学教育において具体的には、一方的に固定した知識、

伝統を教えることではない実習の重視、この世界に学ぶことの強調。狭義の聖職養成というよりも奉仕職の多様性。激しい変革の時代であった。そういう時代に 39 歳という若さで神学院校長に。以後約 18 年間の長きにわたって重責を担われた。

Ⅲ. 1988 年以降 東京教区主教として

◇1988 年ランベス会議と「福音伝道の 10 年」「総合的奉仕職」の強調

主教となられたその年に 1988 年のランベス会議があり参加。1968、78 年、88 年ランベス会議では教会のあり方、世界と教会、宣教と奉仕職について議論を重ねている。女性の司祭按手のことも大きく。1988 年ランベス会議では 20 世紀最後の 10 年間を「福音伝道の 10 年」とし、宣教と奉仕職、教会全体の奉仕職、信徒の奉仕職に多くのページを割いている。

* 「福音伝道の 10 年」Decade of Evangelism (Resolution43)

◇そして決議 45 では、

1. 神が聖霊を通して、洗礼を受けたすべての人の全体的奉仕職 (total ministry) という点で革新を起こそうとされていることを認識し、教会を豊かにし、世界の希望としてのキリストをすべての人に知らせるため、
2. 各主教は、おのおのの教区において、この分かち合われた奉仕職の形が現実化するための訓練やサポートの機会を提供する、必要な手段を講じること。

このような背景のもとで、東京教区主教としての働きを始められている。

◇以後の教区会において (宣教と奉仕に関するポイントのみ)

* 3 月開催。

1988 年教区会 様々な分野での刷新が期待されていることを強く感じる。

1978 年以来継続されてきた教区の宣教体制確立と各教会の前進のための働きを、実現可能な計画案にしていきたい。

関係施設を含めた協働関係の強化を！

1989 年教区会 「福音の宣教：基本的使命の確認」。「福音伝道」と「社会の福音化」(預言者的な責任)。それは不断の礼拝と祈り、み言葉(聖書)の学習と黙想 聖霊の助けによる。教役者への期待。

1990 年教区会 創造の信仰の確認。「この世を支配する霊でなく」。

聖公会神学院の実習での在日韓国人神学生への差別発言への憂慮。

1991 年教区会 20 世紀最後の 10 年間「福音伝道の 10 年」に関して。

宣教の意味の再確認。「社会における神の愛と正義・平和の実現への奉仕」こそが教会のミッションである。

- 1992年教区会 「平和達成に向かう会衆を形成し、平和に向かうキリスト者の証しとなること」「様々な背景の人を包容する寛容な共同体の形成を」
教区の制度改革のこと、「牧師協議会の提案」「結婚と葬送の福音伝道的方策の開発の必要」
- 1993年教区会 「教区機構改革案への注目」
互いに尊敬する心と、共にすべての人の幸いを求めること一司牧に関すること
- 1994年教区会 教区の機構改革案の承認（それまで長く検討・協議していた）
・委員会活動のプロジェクト化（一時期は12プロジェクト）
・教会グループの強化と、相互の、また教区との連携の強化
・宣教委員会の新設と、宣教主事の新設 宣教主事に信徒である岡野峻氏を任命。教区宣教の企画・立案・調整・推進。
- 1995年教区会 福音伝道の10年と戦後50年
*前日3月20日 地下鉄サリン事件
メリーランド・プロジェクト、スチュワードシップ・プロジェクト、青年プロジェクト、児童教育カリキュラム・プロジェクト、信徒奉事者研修プロジェクト、日韓交流プロジェクト、日韓・在日問題プロジェクト、滞日・在日フィリピン人宣教・奉仕プロジェクト、「障害者」プロジェクト、聖公会 AIDS プロジェクト、阪神・淡路大震災復興協力プロジェクト、および「女性司祭の実現を促進する委員会」の設置承認。
- 1996年教区会 「教区宣教方針」採択（「最も小さい者」との出会いの強調）
礼拝・教育・奉仕などを「他者と出会い、仕えるために遣わされる」という運動の中で見直す。
- 1997年教区会 新しい教区制の進展、プロジェクト制度について。
社会的奉仕の宣教活動と並んで、礼拝、サクラメントおよび祈祷生活、聖書を神のみ言葉として学ぶための研修プロジェクトが重視されてきたことに注目。
一教会一牧師体制の再検討、対策を呼びかけ
- 1998年教区会 98年ランベス会議の課題について。
- 1999年教区会 プロジェクト以外の働きへの注目。（1）主教座聖堂一典礼的生活の充実のため、（2）教育・奉仕ワーキンググループこれが「信徒奉事者研修プロジェクト」を引き継いだ（1998年から）一研修会の開催。
- 2000年教区会 教区の宣教目標が今後も堅持されていくことを希望。

* 1998年の総会で首座主教。同総会で女性の司祭按手の件の可決（男性条項の削除）。

- * 1999年1月6日 東京教区の2名の女性の司祭按手。
- * 2000年の12月26日から2001年（21世紀）顕現日にかけて各プロジェクトがそれぞれのテーマを持つの特別礼拝（ミレニアム・ノヴェナ）が9夜連続で行われた。
- * 当時、東京教区33教会に対して、教役者数、約55名前後。

◇東京教区の機構改革について

「東京におけるもっとも小さい（周辺化された）人たちと出会い、奉仕するプロジェクトの試み。神の国にもっとも近くにある人たち。社会的弱者として奉仕するのではなく、イエスを通して啓示された神の国に、私たちを導いてくれる人たちとして。神の愛が支配する社会（神の国）のビジョンを教区が共有する。人間的な善意や同情ではない。私たちが献げる感謝と賛美の礼拝こそが、その活動を推進する（2001年7月22日発行「東京教区時報」竹田主教退職記念特集号、ご自分のメッセージより）

1990年代、社会的に大きな出来事が続いた時代 オーム真理教の事件と、宗教法人法の「改正」問題他。竹田主教は日本キリスト教連合会の委員長、他として取り組み。

IV. 信徒奉事者を巡っての発言

今まで紹介してきたことは直接、信徒奉事者に関わらない。しかし実はこうした全体的な宣教的視野の中に信徒奉事者のこともある、あったということを申し上げたい。

◇竹田主教著の『信徒奉事者とは一教会における信徒の役割についてのふりかえりー』

（発行 1994年12月4日 東京教区宣教委員会 信徒奉事者研修準備プロジェクト）。東京教区のホームページからダウンロードも出来るので是非！

<内容>

- ・はじめに
- ・法憲法規の規定
- ・英国教会やアメリカ聖公会の場合（レイ・リーダー、レイ・ワーカーの紹介）
- ・信徒の奉仕職の変遷の歴史（i 聖職とは、ii 新約聖書の「教役者」と使徒の務め iii 「司祭」という言葉の起源（初代から中世）、iv 中世期一階層制の発達 v 宗教改革一信徒の立場の回復 vi 最近の信徒奉仕職の傾向一宣教への奉仕のための信徒と聖職の協働
- ・礼拝と祈祷と黙想の重要性の再確認一神からの召命としての信徒奉事者

（最後の部分の要約）同書24頁

- ・ 自分に対して神は何を求めておられるのだろう 神の招きへの応答
自分に対する赦しの恵みへの感謝の応答 自分の賜物をささげる意識や責任感
(教会によって多様なニーズ、それぞれに応じて、異なる賜物に応じて)
- ・ 礼拝はレイトルギア「みんなの仕事」。その中で、信徒奉事者はとくに召されて、「みんなの仕事」が適切に執行できるように積極的に奉仕し、牧師を助ける務め
- ・ 基本的に祈祷書が使える どこにどういう祈りがあり、どういう時に使うか
- ・ 祈り、自由祈祷等も求めに応じて出来る 訓練が必要
- ・ 自分で語るよりも、他人の言うことを聴く人
- ・ 困難の中にある人を、具体的には援助できなくても、神の助けを祈りながら見守る
- ・ そのためには、自分自身の祈りの生活が大事。神に寄り頼むこと、聖書をよく読み、自己訓練をすること。神の恵みによって今の自分があり、生きているという信仰によって、この務めは可能になる

◇「信徒奉事者研修プロジェクト」報告書 1995－1996年の概要

(発行・1997年3月)

<内容>

1994年度が準備プロジェクト、1995-1996年にプロジェクト活動

1. 2年間を振り返って(信徒奉事者数の増加。1994年度7教会26名から10教会38名へ。当初26名のうち半数は聖オルバン教会)

2. 信徒奉事者とは

(暫定的定義)「新しい『神の民』である教会の働きは、全体としても、とくに礼拝においても、按手された聖職と信徒の協働によって成り立ち、それぞれ固有の務めを持ちながら、豊かに支え合っています。信徒奉事者はそのことを象徴し、具体的には礼拝を中心に聖職と協力して、教会全体の信仰と奉仕の経験を深めていきます」。

(具体的には)

- ・ 主日礼拝における協力。聖書朗読や代祷、あるいはそれらの手配や準備。分餐奉仕。
- ・ 「朝・夕の礼拝」の司式
- ・ 病床の信徒仲間を訪問し祈ること。病床に聖体を奉持し分餐すること、葬儀の過程への関り(「信徒奉事者による訪問と陪餐」の式文を！)
- ・ 洗礼準備、結婚準備、教会の聖書研究や祈りの集会において役割を担い、とくに祈ること。(聖書を読む会でのファシリテーターとしての期待)。

3. 研修プログラムについて

- ・ 基本的に3年周期で年2回の(可能ならば)宿泊研修。
- ・ 管区・教区のその他の研修的プログラムへの積極的参加の呼びかけ。

(聖餐式、朝・夕の礼拝、教会暦、祈祷書の意味と歴史、病者訪問の式等)

4. 今後について

- ・管区に常設の生涯教育・継続教育の機関を。
- ・神学校の協力への期待。
- ・信徒の奉仕の内容と、そのための研修プログラムの明確化、充実への期待。

その他 (これは竹田主教の発言ではなく、当時言われていたこと)

- ・聖職の不足を補うためのものではない。
- ・「第4」の聖職、聖職予備軍ではない (そういう声があったことに対して)。
- ・信徒奉事者となったことによって、自分の信仰を見詰めること、教会の働きを学ぶことに、より積極的になることが出来た (参加者の声)。
- ・(そういう点からも) 信徒奉事者はあまり固定せず、多くの人が順次関わっていくことが望ましい (当時のプロジェクトの雰囲気)。
- ・誰でもが出来る奉仕。しかし同時に、その時その時、認可されて (教会の周囲の人たちのコンセンサスの上で)、一定の責任を委ねられ、奉仕していく。また信徒の奉仕の「見えるしるし」でもある。

5. 竹田主教の礼拝説教 (1995年11月研修会)

- ・聖書を読むこと (聖書朗読奉仕も含めて)。
- ・祈りをする事。
- ・どこで私たちは主イエスの出会えるのか? 「交わり」「共同体」を意識することは大事だが、その中でも、小さくされているのは誰かということに、いつも関心を持つこと、その人たちのために祈ること。(強調・加藤)
- ・難しい勉強とか神学を研究するというのが、第一の務めではない。
「信徒の目」、lay, 素人であること、普通の人間であることを大事に。

V. あれから約30年(50年!)この間のこと(私見)

○この約30年(管区にレイ・ミニストリー委員会が出来たという1970年から言えば50年)、信徒の奉仕職について、どのような変化や進展があっただろうか?

○教会が信徒も聖職も、それぞれの召命を持ちつつ、共に働く共同体であるという意識の点では大きな変化があったとも言える。同時にその信徒の働き方、とくに信徒奉事者の働き方等を、どのように神学的に位置づけ、実践的に可能にしていくかについては、研修会等も度々ありつつ、なにか一つはっきりとした具体的な進展がみられる状態とはなっていないと感じる(みんな個別に努力しているが、つながっていない?)。

○なぜだろうか。

どのような教会になりたいのか、どのような教会であろうとしているのか！？

その中で、必要な奉仕のあり方も見えてくるのではないだろうか。

○もちろん30年前と変わったことも。東京、京都の神学校もプログラムを用意し、とくにインターネットによって、全国的につながる事が出来るようになった。

○今後のこと。

拙著『神の教会・わたしたちの教会—信徒の奉仕職のヴィジョン—』（BSA 信徒叢書 21、2021年9月、日本聖徒アンデレ同胞会・刊）もご笑覧ください。

VI. おわりに

私ごとで恐縮ですが。2003年6月、小職の主教按手・東北教区主教就任式での竹田主教の説教。

「神の恵みは、かならず私たちの困難や窮状の中に豊かに働いておられます。自分たちの弱さの中に働く神の恵みを提示し、これを証ししながら教会を神の栄光に導いていくことが、主教職に求められるリーダーシップです」。

最後の「主教職に求められるリーダーシップ」を、「教会に求められていること」と言い換えさせていただいても、良いのではないだろうか。

感謝と共に。

以 上.

加 藤 博 道

1950年生まれ。立教大学、聖公会神学院、上智大学大学院（神学研究科）修了。1999年から2000年、アメリカ聖公会の太平洋神学校（CDSP）および英国において礼拝研究。聖公会神学院教員、東京教区司祭を経て、2003年より2017年まで東北教区主教。2020年定年退職。

著書に『心を神に一礼拝への思索と実践』『旅する教会 40話』（聖公会出版）等、共著に『キリスト教礼拝・礼拝学事典』（項目執筆）、『講座 日本のキリスト教芸術』『人物でたどる礼拝の歴史』（日本キリスト教団出版局）等。